

Fernão Mendes Pinto の第一次日本航海

岡 村 多 希 子

Fernão Mendes Pinto の *Peregrinação* がリスボンで上梓されたのは 1614 年であった。題名の日本語訳については、江上波夫氏は「アジア放浪記」としている。これは、河出書房から S.30 年に出たもので、Jack. ブーランジュの抄訳本を底本にしたものである。

Peregrinação の正式名前は大変長く、「Fernão Mendes Pinto の遍歴記。西洋のわれわれの地方ではきわめてわずかにあるいはまったく知られていないシナ王国、タルタリア王国、一般にシャムとばれるソルナウ王国、カラミニヤン王国、マルタヴァン王国、東洋のその他おおくの王国・領国で見聞したたくさんのきわめて不思議なことを語る。巻末にある東洋の唯一の光であり輝きであったイエズス会東洋管区長 S. Francisco Xavier 師父のいくつかのことおよびその死についてかんたんに述べる。Fernão Mendes Pinto じしんによって書かれた。われらの主君この名の国王 D. Felipe 三世カトリック陛下にあてた」というものである。この書物は 1620 年にスペインで Francisco Herrera Maldonado によって翻訳・刊行されて以来、ヨーロッパ各国語に翻訳され、17 世紀だけでも、抄本をふくめポルトガル語版 2、スペイン語版 7、フランス語版 3、英語版 4、オランダ語版 2、ドイツ語版 3 版にのぼる。

ここで作者 Pinto の生涯について簡単にのべたい。

Pinto は 1509 (1511, 14 説あり) にポルトガル中部を流れるモンデゴ川の河口近くのモンテモル・オ・ヴェリョに生まれ、1537 年リスボンを発ってインドに行き、1558 年ポルトガルに帰国した。1554 年前後までの Pinto の動きについては資料がないため、正確なことは知られていないが、作品から推察するところ、モサンビークを経てインドに着くと、そこで知り合ったマラッカ司令官 Pero de Faria に仕えることになり、1543 年までは Faria の命令で、マラッカを起点として、現在のビルマ (Ava, Prom, Pegu, Martavão)、マレーシア (Patane, Queda)、スマトラ島 (Achem, Aru, Siaca)、ジャワ島 (Sunda, Passarvão) の各地を訪れていた。1543 年に Pero de Faria から独立した Pinto は、活動の場をさらに東に移し、とくにシナと日本で交易にたずさわっていたものと思われる。この間、難船やシナ人海賊との戦闘などによって何度も生命を危険にさらしながらも、自分のジャンクを所有するようになっていたらしく、1554 年 2 月 (あるいは 3 月) にゴアに来たときには、富裕な商人になっていた。ゴアに来たのはポルトガルに帰国するためであった。ゴアで、かねてより親しく知りあっていた Francisco Xavier 神父からの便りを手に入れるため何度か聖 Paulo 神学院 (Colégio de S. Paulo) を訪れるうちに、厳しくな修道生活に深く心を動かされ、さらにシナの上川島 (Sanchão) で病死した Xavier 神父の遺体に起った奇跡に接して、入信を決意する。

Pinto のイエズス会入会前後の事情に関しては、イエズス会士の手紙が詳しく伝えている。Cristóvão Aires 著, Fernão Mendes Pinto, subsídios para a sua biografia e para o estudo da sua obra, Lisboa, 1904 (フェルナン・メンデス・

ピント、その自伝及びその作品研究のために)は、10通の手紙の写しを巻末におさめているが、うち2通は、修道士Fernão Mendes 自身の手紙(1554/12/5 付, 1555/11/20 付)である。折しも九州豊後の大友家よりインド副王のもとにポルトガル人神父派遣の依頼が来ており、日本ほど神に奉仕し得る土地はどこにもないと考えたPintoは、危険にみちた冒険生活のあいだに蓄えたすべての財産をなげうって、Belchior, Gaspar Vilela 両神父、3人の修道士、孤児3人から成る宣教師団とともに日本に向かった。1554/4/18 ゴアを発ち、途中マラッカで準備をととのえ、1556/7月はじめ九州に到着した。Pintoはイエズス会の中では新発意^{しんぱつご}ではあったが、この航海にさいしては、豊後の大名のもとに送られる副王の大使の役割を帯びていた。

日本に着いたPintoの行程については確かなことは何もわかっていない。

1555年11月マカオからの手紙を最後にイエズス会関係の文書からPintoの名前は消える。1556/7月～11月のあいだに日本にいるうちにイエズス会を脱会したかれは、1558/2/17 ゴアにもどると、ただちにポルトガル行きの船にのりこみ、9月22リスボンに到着した。作品の中でPintoは、自分のイエズス会入脱会に関しては沈黙を保っており、イエズス会の文書もかれにはまったく触れていないので、脱会の事情は不明のままである。祖国に帰ったPintoは、リスボン近くのAlmadaに隠棲し、結婚し、子どもをもうけた。かれの没年は1583/7/8。Peregrinaçãoの成稿の時期は1578年ごろと考えられている。

さて、「インド、エチオピア、アラビア・フェリス、シナ、タルタリア、マカサル、サマトラ、アジアの果ての東洋諸島で、13度捕虜になり、17度身売られた21年の年月のあいだに私がなめたこれらの苦勞と生命の危険をこどもたちに知らせるために」自伝として書き著した、数々の冒険や東洋の諸事情には、フィクションと事実が巧みに織りまぜてあるといわれている。かれは、作品の中で、実際に自らが体験あるいは見聞したかのようにみせるために、訪れた町の人口、面積、建物の数、高さ、広さ、目にした偶像の数、高さ、胸囲、使用した金属の種類・量などにいたるまで、ことごとくに数字をあげ、うんざりするほどことごとくに描写、説明する。これらの微に入り細にわたっての説明が、いかにもうさんくさく、そのうさんくささがPeregrinaçãoの特徴のひとつであり、また文字通り「面白い」ところと言えるのであるが……。

そこで、今日は、私は、このPintoの「うさんくささ」を、かれの第一次日本航海の記述を通じて紹介したいと思う。大変お恥ずかしいのですが、研究発表というような立派なものではありません。数年来ひとりで読み、訳出してみても、Pintoのいちばん大きな魅力は、やはり、かれが事実をどのように脚色しているか、その手法の巧みさを見るということにあると思うので、その魅力の一端をご紹介することによって、Os Lusíadasのほかにポルトガルにこのような作品のあることを知っていただくというわけです。

Schurhammer¹⁾の研究によればPintoは4度日本を訪れたものと推測されているが、作品の中でも、4度日本に航海している。第一次航海(日本に行こうという確とした目的のもとに行ったわけではないので航海ということばは適当ではないかもしれないが)は、シナとタルタリアでの長い捕囚生活を終って、マラッカに戻るためにシナ東岸のランバカウ(浪白瀆)に行ったところからはじまる。種子島漂着より離日までのこの第一次日本航海の記事

は132～137章にわたる。

日本発見

Pintoたちはランバカウで Samipocheca という海賊の船にのりこみ、ライロー目指してラマウ海岸を航行中、大嵐に襲われた。

「そして、このときにはもうふたたび陸地を見出すことができなかったので、私たちは追い風に乗って、レキオ人の島 (ilha dos Lequios) に避難せざるを得なくなった。その島で、この海賊は土地の王とその他のひとびとに大変よく知られていたためである。そして、このような決意のもとに私たちはこれらの島々にむかって航海したが、先の戦いで殺されたため水先案内人がおらず、東北風は向かい風であり、海流は進路にたいし逆に流れていたため、私たちはさんざんの目にあいながら 23 日間乙字形に潮を切って、ついに主の御意になったことには陸地を見た。そこで、投錨に都合のよい入江か港らしいものがあるかどうかを見るために陸にぐっと近づいたところ、南の方の水平線ちかくに大きな火が見えた。その火から、私たちは、金銭と交換に私たちに欠乏している水を補給してくれるものが誰か住んでいるにちがいないと想像した。

そこで、私たちが島の前面 70 ブラサのところに投錨すると、陸地から 6人の男のりくんだ 2隻の小さな丸木舟がでて来た。かれらは舷側に着くと、かれら式の挨拶とお辞儀をしてから、このジュンコはどこから来たのかと私たちにたずねた。そこで、もし許可してくれるようならそこで交易をしようと商品をもってシナから来たものである、と答えたところ、6人のひとりが言った。許可については、私たちの前方に見えるあの大きい国、ジャパンで支払うことになっている関税を支払うならば、このタニシュマ島の領主 ナウタギンは喜んでそれを与えるであろう、と。また、このようにして、私たちににとって必要なその他すべてのことを私たちに語り、私たちが投錨すべき港を考えてくれた。

私たちは喜んでただちに錨をあげると、船首を小舟にみちびかれて、島の南側にある小さな入江に入った。そこにはミアイジマという大きな集落があり、そこからすぐに無数のパラオが食糧をもって船にやって来たので、私たちはそれを買った (132)

このミアイジマの小さな入江に投錨後 2 時間もせぬうちに、このタニシュマ島の王 ナウタギンが、多数の商人と貴人をしたがえ、交易用の銀をいっぱいつめこんだ無数の大きな箱をたずさえて、私たちのジュンコに来た。そして、慣例のお辞儀を互にかわし、私たちのもとに来てよいということを確認するや、かれはすぐに近づいてきた。そして、私たち 3人のポルトガル人を見ると、この 3人は何ものかとたずねた。顔立ちがちがっているのとあごひげを生やしているところから、シナ人ではないことに気がついたからである。

海賊の頭目は答えた。3人はマラッカという土地のものであり、ポルトガルという国からマラッカに来て何年にもなる。またポルトガルの王は、たびたび 3人から聞いたところによれば、世界の果てに住んでいるのである、と。」 (133)

以上が、いわゆる Pinto の日本発見に関する記事である。

この作品が 17 世紀のヨーロッパ人を強くひきつけ、また全ヨーロッパに Pinto の名を高からしめたのは、Xavier の日本布教と、Pinto の日本発見の条りであったという。

ところで、日本にはじめて到着した西洋人がポルトガル人であり、場所が薩南の種子島であり、そしてその時はじめて鉄砲を伝えたことはよく知られている事実であるが、そのポルトガル人が何という名前であるか、何年何月に到着したのか、到着前後の様子はどうかという点になると、いろいろな説があって、いまだにはっきりしたことはわかっていない。Pinto の供述によれば、かれがタニシュマに着いたのは、前後の文脈年月日から勘定してみると1545年5月4日ということになる。(ただしPintoのあげた年月日は、作品の中だけからも矛盾が多く、同年月日に2ヶ所に居たこととなるようなケースもあって、あまり当てにはならないのであるが)。ポルトガル人は3人で、Fernão Mendes Pinto, Diogo Zeimoto, Cristóvão Borralho である。

史料の中で、年月日と発見者の人名まではっきり詠っているのは唯一の日本側史料である「鉄炮記」(1606年・慶長11年、禅僧南浦文之が種子島領主種子島氏のために著わしたもの)がある。「鉄炮記」は次のように言う。

「天文癸卯12年8月25日に西村の支配人織部丞が海岸に出て見ると百余名を載せた一大船が着いている。乗組員の中に支那人の五峯という者がいて、それと筆談して乗組員が外国の商人であると知り、船を赤尾木に廻させることにした。商人の頭分は一人は牟良叔舎、今一人は喜利志多佗孟太といひ、二人共鉄砲を能くする」²⁾

ここでいう天文癸卯12年8月25日とは西暦1543/9/23にあたる。

西洋側史料にはいくつかあるが、その第一はAntónio GalvãoのTratado dos descobrimentos antigos e modernos...(諸国発見記1563)である。

「1542年Diogo de FreitasがシャムのDodra(アユチアのこと)の町である船の船長をしていたとき、3人のポルトガル人が1隻のジャンクにのってかれのもとから逃げてシナに行った。Antonio da Mota, Francisco Zeimoto, António Pexotoである。嵐のためかれらは陸を離れ、数日のうちにJapanという島を東方に見た」³⁾

Galvãoは3人のポルトガル人の名をあげてはいるが、かれらが日本に着いたとは言っていないし、その地点にも触れていない。しかしRodriguesは「日本教会史」の中で、Galvãoの著書に触れ、3人のポルトガル人の船は「薩摩Satçumaの海上にある一つの島で種子島Zanegaximaと呼ばれるところに入港した。そのところでポルトガル人たちは鉄砲の用法を教えたので、その用法がそこから日本に広まり、鉄砲製造を教えポルトガル人の名前は今もその島に伝えられている」と述べて、到着地点が種子島であったと確言している。そしてさらに、「フェルナン・メンデス・ピントは、彼の作り物の書物で、自分自身をこれら3人の中の1人だとして、このジュンコに乗っていたのだとしているが、それはこの書物にある他の多くのことと同様偽りである。彼は実地に見なかった国や事件は一つもないように書いているので、真実を伝えるためよりは、むしろ娯楽のために彼の書物を著したと思われる」とPintoを手厳しくやっつけている。⁴⁾

この件に関する史料としてはほかにスペインのEscalante Alvaradoの1548/8/1付報告書がある。これによると2人のポルトガル人がシナのジャンクで琉球諸島の一つに吹きつけられてその島の王に歓迎され、その後、これと知った他のポルトガル人商人がこの島に行ったが、こんどは上陸を許されなかったという。⁵⁾

さて、3人のポルトガル人が種子島に着いたという点については、Pintoの言は、上にあげたGalvãoの説と一致している。しかし、その3人の人名については異同がある。

「鉄炮記」のいう牟良叔舎はフランシスコ、喜利志多はキリシタ、佗孟太はダ・モタであろう。

Galvão のいうのは António da Mota であって キリシタ ではないか、キリシタ はキリスト教徒の cristão を人名として伝えたとも考えられないことはない。そうすると「鉄砲記」の 2 人は Galvão のいう Francisco Zeimoto と António da Mota の 2 人にあたるとみることができる。もっともキリシタは Pinto のいう Cristóvão Borralho を指すと考えることも不可能ではない。Zeimoto については Diogo と Francisco の違いはあるが Pinto と Galvão は一致している。

Pinto:	Fernão Mendes Pinto Diogo Zeimoto Cristóvão Borralho
Galvão:	António da Mota, Francisco Zeimoto Anotónio Pexoto
「鉄砲記」	牟良叔舎 喜利志多・佗孟太

このように人名については 3 者複雑にからまりあっている。しかし肝心の Fernão Mendes Pinto の名あるいはそれらしきものは、他の史料にはまったく見あたらず、Rodrigues は先に引用したとおり、3 人の 1 人と自称していることは偽りであるときめつけている。

Pinto 説を否定するものはイエズス会関係者で、とくに Schurhammer は、詳しい研究の結果、ポルトガル人の琉球到着は 1542 年、種子島到着 1543 年、豊後到着 1544 年で、1543 年ごろ Pinto は ベグ カゴア あたりにいた公算が強いと論じている。ただし、日本発見者の 1 人ではないにしても、Pinto の第一次航海は発見直後の 1544 年であったと推測している。⁶⁾

鉄砲伝来

種子島に到着した 3 人のポルトガル人が鉄砲を伝え、この鉄砲が島の名に因んで種子島銃と呼ばれたことはよく知られている。この鉄砲とは Pinto や Rodrigues が espingarda と呼んでいるもので、幸田先生によれば長さ 718 ミリ、厚さ 2 ミリ、口径 16 ミリということである。鉄砲について Peregrinação は次のように述べている。

「私たち 3 人のうちのひとりで、ディオゴ・ゼイモトというものは、持っていた鉄砲をときどき発射しては暇つぶしをしていた。鉄砲撃ちを大変好み、また大変に上手でもあったのである。……」

日本人たちは、そのときまでかつて見たことのなかった新しい射撃方法を見てナウタキンにそのことを急報した。かれはこのとき外からもたらされた数頭の馬の走るのを見物していたのであるが、この報らせに驚いて、狩猟をしている沼にゼイモトをすぐに呼びにやった。そして、ゼイモトが鉄砲をかつぎ、シナ人に獲物を運ばせて来るのを見ると、これにすっかり感心してしまい、目の前にあるものを気に入っているということがあらゆる点について見られた。その時までその国には火砲が全然なかったので、それが何であるかわからず、また火薬の秘密も理解できなかったからで、みなは魔術であると考えた。

ところで、ディオゴ・ゼイモトは、ナウタキンが示してくれた礼遇の幾分かにかたえ、か

れを喜ばせるには、かれに鉄砲を贈るに優るものはないと悟り、沢山のはときじばとを仕とめ猟からもどったある日、それをかれに進呈した。ナウタキンはそれをきわめて貴重な品物としてうけいれ、シナの全財宝よりもずっとそれを大切にするといい、そのお礼として銀1,000タエルをかれに贈り、火薬の作り方を教えてくれと熱心に乞うた。火薬がなかったら、鉄砲は無用の鉄くずにすぎないからである。そこでゼイモトはその作り方を教えることを約し、それを実行した。そして、それというのもナウタキンの喜びと気晴らしのすべては、この鉄砲の練習にあったので、かれの家来たちは、王がこれほど気に入っているその鉄砲以上にかれを喜ばすことのできるものがないのを見て、その鉄砲を真似て同じような鉄砲をほかに作らせることにし、すぐにそれを実行した。

したがって、この鉄砲熱はその後ますます盛んになり、それから5ヶ月半後、私たちがそこを立ち去ったときには、その地には600丁以上の鉄砲があった。

そして、のちに副王ドン・アフォンソ・デ・ノロニャが進物を託して私をブゴの王のもとに最後に派遣したさい、すなわち1556年に、日本人たちが私に断言したところによれば、この王国の首府であるフシエオの町には30,000丁以上あった。そして、このものがそんなにひどく増えるなどということはあり得ないように思われるので、私がこれにたいそう驚いたところ、信頼し得る立派なひとである数人の商人が言い、また多くのことばをもって断言したことには、日本全島で300,000丁以上の鉄砲があり、かれらだけでも、6度にわたって25,000丁の鉄砲を交易品としてレキオ人のもとにもって行ったということである。

それ故、ゼイモトが善意と友情から、また、まえに言ったようにナウタキンからうけた礼遇、恩顧の幾分か返礼するためにかれに贈ったわずか1丁の鉄砲が因で、その国は鉄砲に満ちあふれ、どんな寒村でも少なくとも100丁の鉄砲の出ないような村や部落はなく、立派な町や村では何千丁という単位で語られているのである。

このことから、この国民がどんなひとたちか、生来どんなに軍事を好んでいるかがわかるであろう。かれらは、既知の他のいずれの国民より軍事に楽しみを見出しているのである」

(134)

Zeimoto から鉄砲を譲りうけたナウタキンとは、種子島第14代島主種子島時堯を指すものと思われる。時堯は直時とも呼ばれていた。時堯が鉄砲をポルトガル人から譲りうけ、これを製造させたことについて「鉄炮記」は大要次のように伝えている。

領主種子島時堯は二人（牟良叔舎、喜利志多佗孟太）に請うて鉄砲を譲りうけ、家臣篠川小四郎をして火薬製造の法を学ばしめ、金兵衛尉清定をして鉄砲を模造せしめ、翌年遂に成功した。この頃、紀州根来寺（和歌山県那賀郡根来町）の杉坊妙算というもの、千里を遠しとせず種子島を訪れて、鉄砲のゆずりうけを交渉する。時堯はその熱意にほだされ、一丁をゆずりかつ火薬の製法を教える。その後、堺の商人橋屋又三郎が、琉球貿易の旅の途中、種子島に立寄り、一兩年滞在してこの鉄砲のすべてをきわめ、堺に帰ってその製造をはじめ。堺の鉄砲は販路を関西から関東にまでひろめ、彼は鉄砲又の異名を得る。⁷⁾

ところで機会あるごとに数字を並べるのがPintoの特徴であり、その数字は荒唐無稽あるいは針小棒大な場合が多い。かれがここで言っている鉄砲の数も無論真実とは思われないが、数字の真偽はともかくとして、時堯が鉄砲を譲りうけたことにより、鉄砲が急速に日本に広まったことは間違いなく事実である。「国友鉄砲記」によれば、鉄砲伝来の1年後の天文13年2月將軍義晴は早くも国中から優秀な鉄匠を尋ねだし鉄砲の製造を行わせるよう管領細川晴元に申しつけ、このようにして国友村（現・滋賀県長浜市国友町）が鉄砲製作を行

なうようになったという。国友村の鉄砲業を組織的な工業へと上げたのは信長であった。⁸⁾そして天正3年(1575)の長篠の合戦で鉄砲の使用が信長の命運を決し、日本統一へと導いたことは私たち周知のとおりである。

大友義長の銃傷

ブンゴ王からナウタキンのもとに使者が来て、病中の慰めに「世界の果のシェンシコジン」をブンゴに寄越して欲しいと言ってきた。Pinto が選ばれてブンゴの首府フシエオに行くことになり、「わずか一晩でこのタニシュマ島を越えると、夜明けに陸の見えるところ、イアマンゴという入江に着いた。そして、ここからクアンギシュマアという立派な町まで行き、穏やかな季節風によって航海を続け、翌日タノラという立派な部落に到着した。そしてここから翌日ミナトという部落に行き、そこからフィウンガアに向った。そして、このように毎日寄港し、よい食糧を補給しながら、町から7レグアのところにあるオスキというブンゴの王の要塞に到着した」(135) ここから陸路フシエオに行った。

ブンゴ王とは大友義鑑^{しのり}を指すものと思われる。種子島にブンゴの使いが来たというのは、はなしを豊後の府内に移すためのPinto の創作であろう。

タニシュマ からフシエオまでのPinto が通ったという地名、イアマンゴは山川、カンゲシュマは鹿児島、タノラは外浦、ミナトは湊、フィウンガは日向、オスキは白杵に比定され、このあたりに関するPinto の地理上の知識が正確であったことを示している。Pinto は1554/12/15 付手紙の中で、「私が王国〔ポルトガル〕からインドに来て18年になります。そしてシナと日本のあたりを歩くこと16年になります。……日本では、そこに行くたびにあるいは〔船を〕派遣するたびにいつも損をしていました」とっており、⁹⁾ Schurhammer もPinto が4回日本を訪れていたものと推測しているところからも、九州の地理上の知識を実地に身につけたものと思われる。

ブンゴで体験したことをPinto はさまざまに伝えているが、その中に、王子の怪我に関する記事がある。長いので要約すると；

王の愛していた次男アリシャンドノが私の鉄砲をたいそう気に入り、私が昼寝をしているときに鉄砲に手をかけ、操作を誤まって怪我をした。ブンゴ王の家臣たちは私が王子を謀殺しようとしたのだと思いこんだため、私は一時生命の危険にさらされた。しかし、誤解が解け、アリシャンドノの傷をなおしてやったため、王は私に大いに感謝し、私に敬意を払うようになった(136～7)

豊後王の次男の怪我について、Luis Frois は1577/6/6 付手紙の中で大友義鎮^{よしげ}の次のことばを伝えている。

「ポルトガル船がシナから日本に航海していたとき、私は3年間私のもとにひとりのポルトガル人をおいていた。かれは山口の王である私の弟の鉄砲の怪我をなおしてくれたことがある。その傷というのは手を裂いてしまったのである」¹⁰⁾

さらに1578/10/16 付手紙によれば、このポルトガル人はDiogo Vaz d'Aragão といい、当時48,9才であった義鎮が16才のとき、すなわち1545年か6年にJorge de Faria とともに来日したということである。

ここでいう山口の王、^{よしげ}義鎮の弟というのは大内氏に迎えられた^{よしの}大友義鑑の子、大友八郎義長のことであり、Pinto のいうアリシャンドノとは八郎殿のなまったものと思われる。八郎義長が鉄砲で怪我をし、ポルトガル人の手当をうけたということは、大友義鎮の証言からまぎれもない事実ということになる。しかし、怪我をなおしたポルトガル人はPintoではなく、Diogo Vaz d'Aragão であった。何かの機会にDiogo Vaz d'Aragão のしたことを聞き知ったPinto が、これを自らの経験として語ったものと思われる。この手はPinto が作品のあちこちで使っているものであり、たとえば日本発見などについても、かれの証言が大いに疑われるゆえんでもあるのである。

- 1) Fernão Mendes Pinto und seine "Peregrinação"
G. Schurhammer
- 2) 幸田成友著「日欧通交史」 p. 3～4
- 3) 同上書, P. 7
- 4) 「日本教会史」 p. 185～6
- 5) 幸田成友前掲書, p. 12
- 6) G. Schurhammer 前掲書
- 7) 奥村正二, 「火繩銃から黒船まで」 p. 29
- 8) 同上, p. 34
- 9) Cristóvão Aires, Fernão Mendes Pinto, Subsídios para a sua biografia e para o estudo da sua obra, p.60
- 10) G. Schurhammer, 前掲書 p. 227～8

以上のほか Le Gentil の "Fernão Mendes Pinto, un précurseur de l'exotisme au XVII^e siècle", 1947 を大いに参考にした。